

# 最近10年間のMDS開発と利用に参画して

浅野 美代子

## 1. はじめに

最近10年間の電算機関連の技術進歩はめまぐるしく、私のように日々電算機と生活している者ですら、ついていくのがやっとの状態である。

10年前私どもが使っていたマシンは、FACOM 230-50で当時国内に数台しか動いていないという人間味あふれる電算機で、カタカナを出力させるためには、ワオコードといったシフトコードが必要だったり、ラインプリンターもそのつど打ち出し、ジョブのオペレーションをしているとそのプログラムが何をしているか手に取るようにわかる。またコンソールタイプライターもなかなか言うことを聞いてくれず、STACK COを入力してリターンキーを強く押してもなかなかヘッドがもどらない。こんな時は平手で横を叩くがまったく変化ない。仕方なく今度は手が痛くなるのを覚悟して思いきり叩く。「あっ、いたい！」と思うと、カチャカチャカチャ。無事にジョブが始まった。こんな調子であった。

さらに余談になるが、磁気テープ読取装置にMTをセットする時には凸凹をつなぎ合わせる。ところがこの凸凹の部分は何回か使うとすぐに切れてしまう。切れた時にいかに早く修理するかが、与えられたオペレーション時間をいかに有効に生かすかの鍵である（われわれ開発に割り当てられ

ている時間は給料計算等経常ランとよばれている時間に比べかなり厳しかった）。私はかなり早くこの修理をすることができるようになり、これが技術というものかと思ったりした。

このマシンもついにFACOM230-58へと移った。以前1時間半もかかっていたファイル変換プログラムの実行がなんとわずか5分。

そして現在はFACOM M180IIADにコンバートされた。50時代にはカタカナさえも苦勞して出力していたが、今はありとあらゆる漢字および罫線、枠などプレプリントに頼っていた定型用紙など何でも出力できる。

電算機で自由に日本語が扱えるのである。今までほんの一部の人間の独占物でしかなかった電算機が、日本語サポート機能により、まさに誰でもが、いつでもどこからでも使える時代がやってきたのではないだろうか。電算機で日本語が自由に扱えることはわれわれ日本人にとって数学の世界での「零の発見」にも等しい画期的なことだと思う。

## 2. MDSの歩み

MDS (Management Decision System) は富士通㈱と開銀で共同開発されたシステムであり、MDSS(Management Decision Support System)ともいう。

昭和46年より50年、主にFACOM230-60で開発された。システムの構想や機能については他に

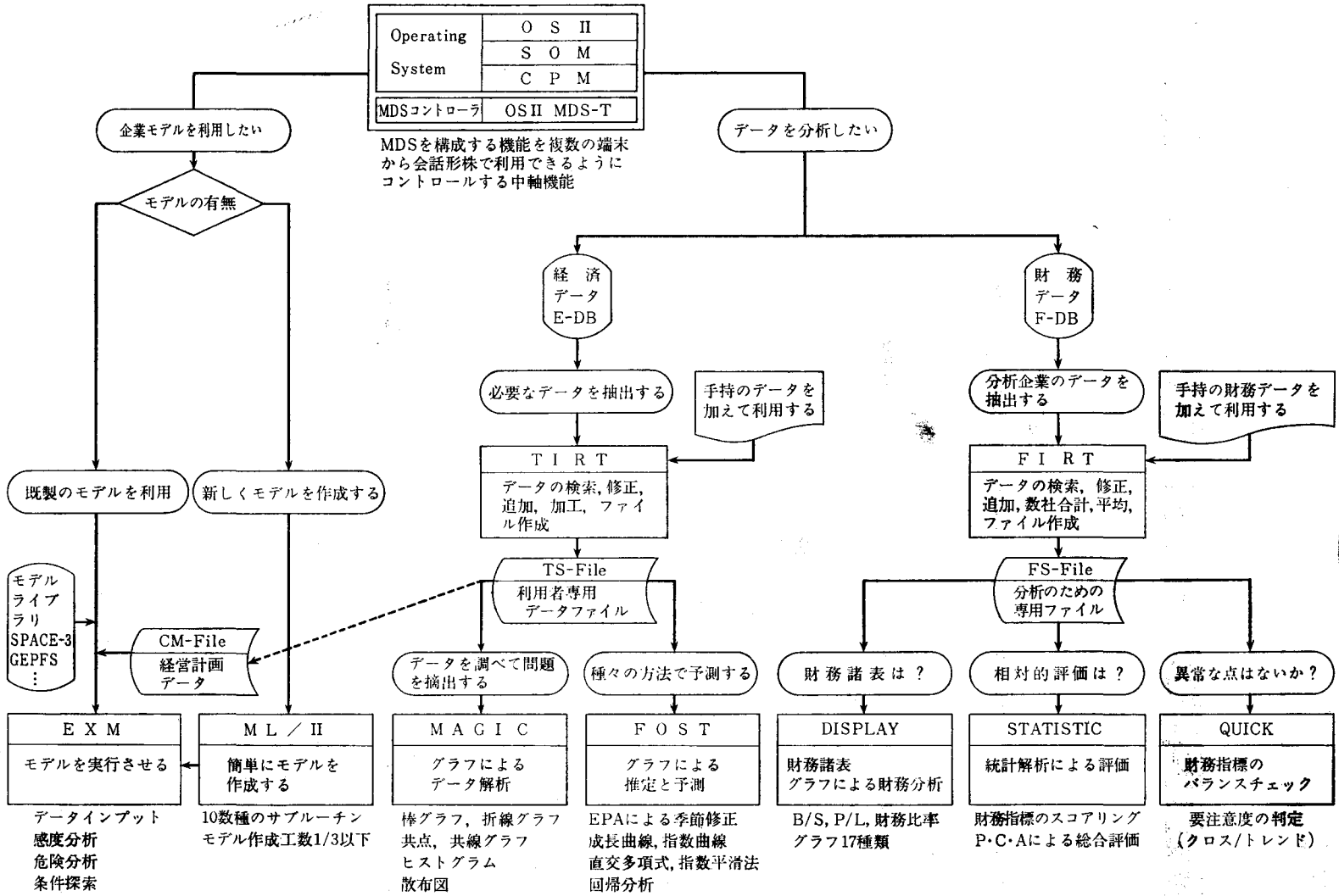


図1 MDSの構成 (MDS開発状況に依りて異なる)

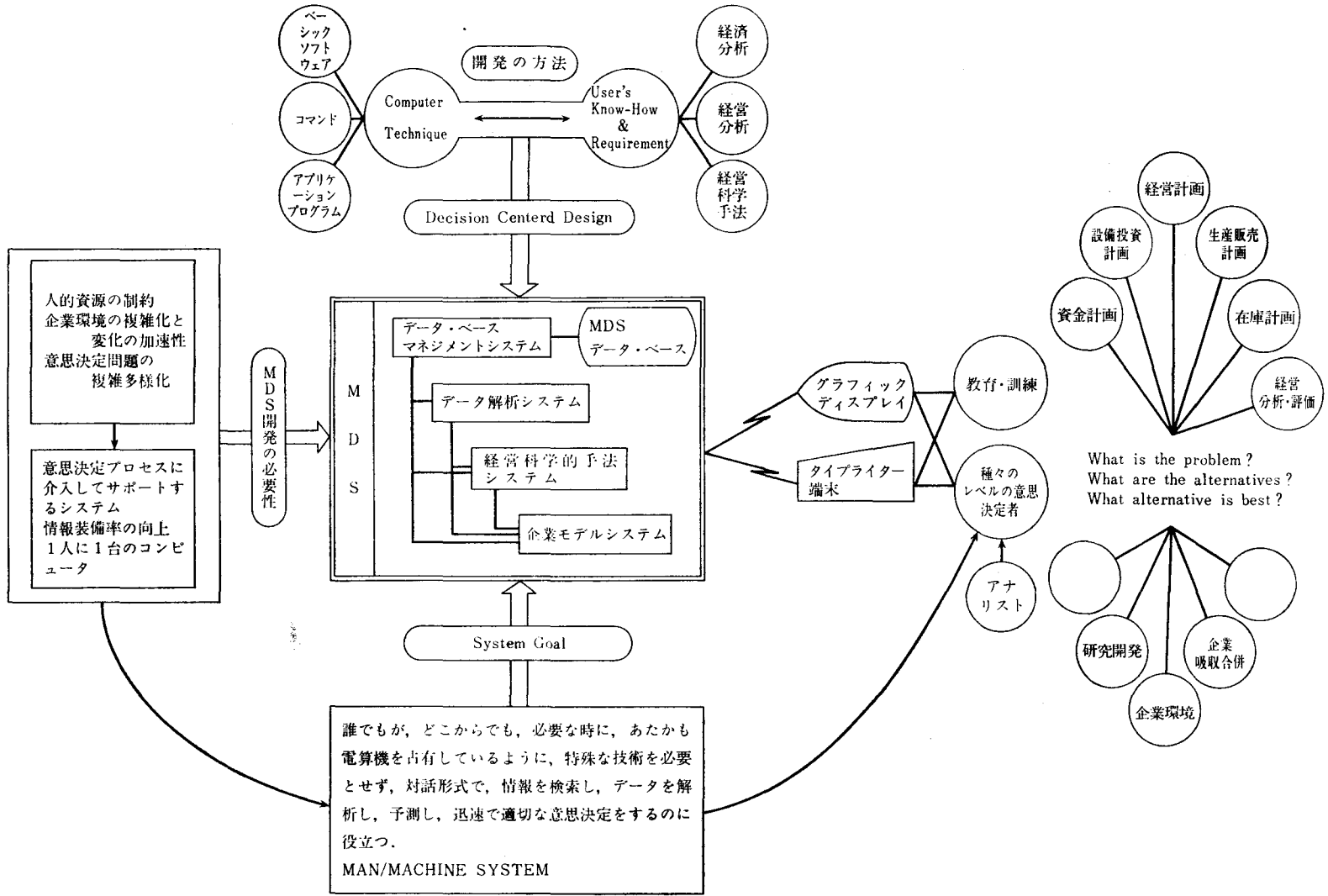


図2 MDS開発の目的と構想 (MDS概要より)

論文や解説書があるのでそちらにゆずり、ここではあまり触れない。開発当時のMDSの構成を図1に示す。開発中はソニーテクノロジズのグラフィック端末を設置しテスト的に利用していた。

FACOM230-58 導入後は、グラフィックディスプレイでMDSが実用化された。

さらにMシリーズでは、MDSⅣになり、あらゆる種類の端末で利用可能なシステムとして生まれ変わった。日本語サポートやカラーグラフィック表示機能などがある。

### 3. MDSのねらい

MDSのねらいは誰でもがいつでもどこからでも情報を参照し必要に応じ、その情報を適切に処理することによって電算機を経営意思決定に役立てようとするものである。これはまさに経営判断業務の機械化を志向したシステムだと思う。開発当時のMDS開発の目的と構想を図2に示す。この構想が10年以上も昔に、データ処理等の技術やハードウェアもはなはだしく未熟であった時代に行なわれたことは驚くべきだと思う。MDSは過去に累積保存されたデータの有効利用でもある。

### 4. システムとしてのMDS

MDSの目的が達成されるためには、必要で十分なデータおよびデータを検索利用するためのマシン言語であるコンピュータプログラムなどが必要である。これを図に書くと図3のようになる。MDSの基本構想作成時に、すでに以前より蓄積されている財務データと日経NEEDSなどのマクロデータがMDSのデータベースとして考えられていた。現在でもそのデータ内容システムはともあまり変化がない。これについて10年前にMDS開発にたずさわった人より「MDSは10年前とちっとも変わっていない。(いったい君たちは何をしていたんだ!)」と言われたことがある。「2度にわたるコンパートがあったんです」「利用者の声を聞いてこんなに使いやすくなったんです

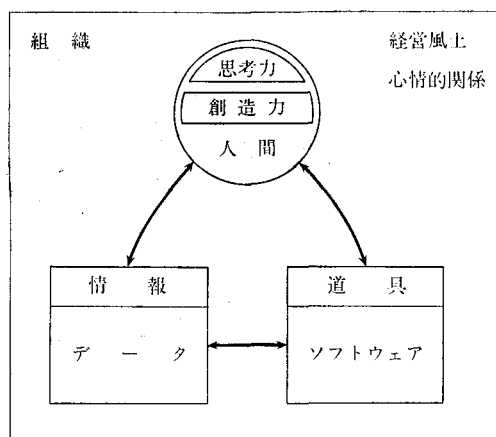


図3 意思決定とコンピュータ

よ」「MDSⅣになる時切り捨てられたMDSの機能を自力で使った」とか「種々のデータベースについて検討していたんです」とか「私1人で何ができるのでしょうか」

いろいろのことが頭の中に一齐に浮かんだが、まさに首筋に刃物をつきつけられている感じで一言も言えない状態であった。はたしてMDSは10年間変わらなかったのでしょうか。実用開始からの10年間の利用を見ているといろいろのことが考えられる。

経営判断業務の機械化がされる段階はまだまだ早かったのではないだろうか。MDSでは、利用者の用いるデータ・情報・知識のきわめてわずかの部分しかコンピュータライズされていないし、情報を組織化しようとする動きがなかった。

したがって、財務分析企業評価システムは研修のために利用される以外は、ほとんど利用されていないのが現状である。この企業評価システムは、財務指標による定量的企業評価を行なっている。企業の側面を収益性、健全性、資産効率、成長性および規模の5つより分析する。収益性、健全性、資産効率は主要財務8指標より主成分分析を行なって評点化し、成長性、規模もそれぞれ財務指標を基準化して評点化し、さらにこれらの値より総合評点を算出している。

企業評価はもちろん財務分析のみで行なわれる

ものではないが、定量的企業評価の部分には利用されてもよいと思われるが、ここ10年ほとんど利用されてこなかった。この原因を考えてみれば高度に集約され、高度に構成されているがゆえに不満足であるとか、利用者が希望している情報および情報に対する処理が異なっているためであるとか、あるいは利用者の単なるコンピュータアレルギーによるものとか、それとも定性的な人間が多いからなどと考えられる。

しかしながら調査研究分野では、経済分析マクロモデル景気動向調査等に頻繁に利用されており1人月100時間くらい利用されている。

また都市開発用シミュレーションモデルは営業審査および研究部門で非常によく使われ、貸付業務に利用されている。

このように定型的判断業務の機械化はすでに定着化しているといえる。

MDS自体は、この10年間あまり変化しなかったし利用者も限られていたが、組織に働きかけた影響はあったと思われる。その10年間の歩みはすでにデータベースの見直しとシステムの再構築が始まっている新情報システムへの基盤となったといえると思う。さらに高度なレベルでの利用には次のことが必要ではないかと思う。

## 5. 今後に向けて

組織全体を通じて全般的な情報システムを積極的につくり上げるための中心的手段として電算機を利用しようとするならば、以下のことが必要であろう。

- (1) 組織内の各領域・各職務での情報要求を確認して包括的な計画を作成する。
- (2) 利用者が望んでいる情報の処理を正確に把握する。
- (3) データベースにどの程度詳細なデータが必要かを決定する。
- (4) データの職能を超えた統合を容易にするため、異なるシステムから各種のデータを利用で

きるようにする。

- (5) 利用者は個人的データあるいはファイルの作成・保管をやめて共通なデータを利用する。このことは組織へも影響をおよぼすと考えられるし、人事組織を固定的なものと考えないことが必要だと思う。

## 6. おわりに

「女性OR研究家」の特集を組まれるとうかがったので、深い考察なく日頃考えていることを書かせていただいた。もうじき4歳になる息子に「ママの好きな銀行へ行くの？」と送られて（まったく男は勝手なことを言うと思いつつ）サービス部門に徹しようと、今日も仕事に励んでいます。

## 参考文献

- [1] 安部正弘他：日本開発銀行における経営分析システム FUJITSU Vol.33 No. 4 (1982)
- [2] 奥野忠一・山田文道：情報化時代の経営分析，東大出版会 1978
- [3] ハーバート・A・サイモン：意志決定の科学，産業能率大学出版部 1979
- [4] 横山 保：意思決定の科学，中央経済社 1972

## 『OR事例集』発行

「OR事典」増補別刷として「OR事例集」が10月25日発行されました。「OR事典」発行より8年を経過したため、事例の分野分類にはかなりの変化があり、本書では分野分類を新しくいたしました。OR事典をおもちの方は時の流れをお読みいただけると思いますし、事例集だけでも十分お役にたつものと信じております。

ぜひ皆様のお手許に1冊お揃えのうえ、ご利用ください。

定価 2400円 送料 250円

お申し込みは、日科技連出版社、または本学会へ